目次

□研究
朝鮮製紙株式會社の事業（續）
安藝小林區概況
□隨筆
如是我聞錄
秋田に活動した人々
後の一年有半
□雜報
學校便り
會員消息
謹賀新年
其ノ他

大正八年一月廿五日　第百十一號　毎月廿五日發行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

生徒募集廣告

來四月本校第一學年ニ入學セシムベキ生徒約五十名募集ス手續概略左ノ如シ

大正八年一月

長野縣立木曾山林學校

○入學手續

本校ニ入學セントスルモノハ入學願書ニ履歷書、戸籍謄本及體格檢査書ヲ添ヘ來三月二十五日迄ニ差出スベシ其ノ樣式左ノ如シ

入學願書（用紙美濃紙）

御校第（何）學年ヘ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書身體檢査書及戸籍謄本相添ヘ此段願上候也

何府（縣）何郡（市）町村何番地居住
（寄留ナレバ寄留地ヲモ記入スベシ）
誰子（弟）等
職業
何府（縣）華（士）族（平民）
年　月　日　入學志願者　何　某㊞
同　上
同　上
右父（兄）（後見人）何　某㊞
長野縣立木曾山林學校長七宮純雄殿

履歷書

本籍　何府（縣）何郡（市）町（村）番地
族稱誰子（弟）又ハ戸主
寄留地　何府（縣）何郡（市）町（村）番地
何　某㊞
生年月日

學業

一何年何月ヨリ何校ニ於テ何年修業又ハ卒業（證書ノ寫ヲ添フベシ）
一何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就テ何學修業等賞罰
一何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞若クハ罰ヲ受ケシ等
右之通リ相違無之候也
年　月　日

身體檢査書

本籍　何府（縣）郡（市）町（村）番地族稱
寄留地　何府（縣）郡（市）町（村）番地
何府縣族稱
何　某
生年月日
一體格　一身長　一體重
一胸圍　一中心視力　色盲眼病
一聽力　耳疾　一痘　一呼吸器
一神經系　一皮膚　一言語
一既往現在ノ疾病又ハ畸形
一四肢運動障害ノ有無
右檢査候處相違無之候也
年　月　日檢査
住所
何學校醫又ハ醫師　氏名㊞

尙詳細ハ本校ニ承合セラルベシ

注意　入學試驗期日ハ四月一日ヨリナリ

研究

朝鮮製紙會社の事業（承前）

深山の埋木

第五　敷地の位置及防波堤の築造

工場の敷地は約六千萬坪で鴨緑江畔に隣接してゐるから其の全部が氾濫地帶に屬して居るので敷地の四圍は堤防を廻らすの必要がある、基礎工事の一部とも見做すべき此の堤防の修築はなか／＼一大事業とする所であつて相當の日子を要せねばならぬ。

昨年末から此の工事に取り掛り極力工事を急がせてはゐるが本年の出水期前迄には到底全部の竣成を告げさせることは不可能事であるから止むを得ず堤防の規模を縮少して其包擁地域を鐵道用材に屬する部分約七萬坪と當會社所有の敷地五萬坪との合計十二萬坪だけに制限した是れだけは怎うしても出水期前迄には工事を完成せしめなければならぬものである

第六　固定資本と其内譯

第一期の事業として一萬噸の「パルプ」製造原料は營林廠から全部供給して貰ふ事に協定されてある其後は營林廠の都合と相待つて漸次製産能力を増進せしめ更に第二期第三期の擴張を策する計畫である此の一萬噸の生産は最少限度のものであつて製造に著手の年度から實現せしめようとして居る否確に實現せしめ得る確信がある、此の計畫の下に樹てた工場建設費の豫算額は固定資本參百五拾萬圓であつて其の内譯は左の通りである。

△貳百拾八萬九千四百參拾圓餘　「パルプ」製造機械原動機其他機械器具一式代

△五拾五萬八千圓　工場及附屬建物代

△五拾參萬六千圓　土地代金竝土工費

△貳拾壹萬六千五百六拾九圓餘　諸經費竝に豫備費

第七　工場建設の順序と製品著手

昨年十月から王子製紙會社の技師長が來て工事の設計に從事され既に大半を了したから今春解氷期を待つて工事に著手して本年中に凡ての工事を竣成せしめ明大正八年上半期から作業を開始せしむる豫定である、それで製紙機械は瑞典ニボイラー、ステームタービンは米國に注文し其他内地に於て需め得られる器具は内地の各工場に夫々注文してあるが是れ等は何れも七、八月頃迄には著荷する都合になつて居る、唯多少懸念すべきは米國の形勢が今後如何に變化するか若し不幸にして器械類の輸出禁止といふ樣な厄に逢つたならば迷惑するが現在の狀態から見れば昨年の夏に注文し本年七月迄には積出すべき契約の成立してゐるものを無下に我社の注文品に對し輸出嚴禁するといふ樣な想像は全く杞憂と謂ふべきであらう

要するに工場建設材料等の木材煉瓦其他一切の用品竝に製造機械器具から製品材料等順潮に整備する手筈になつて居るから不慮の事變が突發しない限りは豫定の進捗を見て大正八年度以降第一期計畫に屬する「パルプ」一萬噸乃至二萬噸を製産し得られる事となるであらう。（了）

安藝小林區概況

小崎次郎

一　管轄區域

安藝小林區署の管轄區域は安藝郡の西部に位し一町十三箇村に跨り香美郡槇山村の一部大字中津尾を含む管内國有林の面積左の如し

要存地國有林

流域	所在町村	面積（町）
名村川	東川村大字原北賀	二八七・三七
伊尾木川	同村大字大井古井	五、三二七・七七
安藝川	畑山村大字畑山	三三九・四四
同	槇山村大字中津尾	一九四・九八
合計		六、二三九・四六

右記の外西分和食赤野安藝の四町村の海岸に合計一町二畝四歩の不要存置林あり

前記區域を五保護區に分ち壹區域毎に、判任官一名を配置駐在せしめ、其區域内に於ける國有林の保護經營業務を擔當せしむ、保護區官舍の所在地及其擔當國有林面積左の如し

保護區名	保護區所在地	擔當面積
第一號安藝	安藝町西濱	八三九・五三
第二號大井	東川村大井	一、九四九・九一
第三號島	同　島	一、一九七・二四
第四號別役	同　別役	一、五二八・五六
第五號畑山	畑山村畑山	七三四・三三
合計		六、二三九・四六

近時造林面積年々增加して火災其他の被害不少一層周到の取締を爲すの必要あり因りて大正三年度より造林面積の大なる第一二三の保護區には造林定夫を常置して專ら造林地の取締に當らしめ居れり

伊尾木川兩岸を各一箇所に於て官行に依り斫伐製炭の事業を經營せり、之が爲め其各當該箇所に事務所を置き、尚此生產製品を貯藏保管する爲め伊尾木海岸に土場を設け事務所を置き、各職員を配置し之に關する事務を擔任せしめ居れり

二　保護管理

國有林と民地境界查定は、明治廿六年より同卅三年迄の間に施行し、同時に林地の測量をなし面積を測定し而して境界線中の要點には石標を建設して、將來に於ける境界紛爭の虞なからしめ兼ねて國有林事業の計畫實行の基礎たらしめたり

最近には大正元年八月の暴風は、其猛烈の度稀有にして從て國有林の被害も隨分多額なりしも、其以外被害多かりしは盜伐なり、盜伐は以前は一般に「ソムキ」と稱へて犯罪視せず、獨り當署管內のみならず到る處の國有林其害を被らざるなく林區署員は盜伐の事務に忙殺せられたるものなりしが人智次第に進みて、漸次舊時の陋風改まると共に一方には事業發展保護周到なるに至りて、亦昔日の如き盜伐の被害なく今日は實に隔世の感に堪へざるなり

三　施業方針

當署國有林の施業按（施業按とは森林の產物をして永久盡くる事なからしめ同時に其森林の狀態を常に合理的に導き兼ねて國土保安其他公益を保續する趣旨を以て森林の植伐に關する基礎方針を定むるを云ふ）は明治四十年初めて編成したるも、爾來森林產物の利用程度等上進一變したる結果大正元年十月按の檢定に著手し、大正二年二月其業を了へたり現時は此檢討に係る施業按に基づきて事業を實行し居れり

當署國有林は名村川伊尾木川安藝川の三流域にあり、海岸より近きは四里遠きは十四里に及ぶ、地勢概して嶮峻只中腹以上稍緩斜なるを常とす、地質は一般に中世層なれども大部分は朽土深く植物生育良好なり、天然林地約四七〇〇町歩藩政時代の造林地約一四〇町歩林區署時代の造林地一三〇〇町歩其他は溪流伐採跡地等（檢訂當時の調査）なり、造林地は杉・扁柏・欅等にして、天然林地は針葉樹にありては樅・杉・扁柏・松之に次ぎ、地方特有の五葉栂一部に點在す濶葉樹の常綠樹は榊・シキミ・アセビ多く樫類椿亦少からず、落葉樹はカエデ類・サルタ・トチ・ブナの類なり

檢訂當時の總蓄積及樹種步合左の如し

總蓄積　四、五二八、五〇〇石

樹種步合　栂四三％　樅一八％　杉六％　扁柏二％　松一％　五葉松其他三％　雜二七％

壹町步平均約七四〇石なり

現在の天然林四、七〇〇町步は今後六十年間に於て、上木は一箇年約八十町步宛下木は三十年每に二回約百町步宛伐採更新の計畫なり

更新の樹種は扁柏・杉を主として、此外欅・樅・栂其他有用樹種を適地に植栽し天然生の有用樹種は力めて撫育保護し、既植の造林地と共に百年の輪伐齡を以て施業するの方針なり

四　斫伐

國有林の產物は以前は悉く立木の儘賣拂をなしたり、此の場合年々同一の者に之を獨占せしむること能はず、而して年々買受人異る時は多額の固定資本を投じて運搬機關を完備する事不可能なるは免れざる所なり、自然產物の利用充分ならざるのみならず、經濟界の消長によりて既定の處分を行ふこと能はざる場合をも生ずべくして、折角確定したる施業計畫も遂に實行に由なからんとす、加之立木賣却は假へば農家が收穫米を田の中に於て處分するに似て必ずしも守株拘泥するに及ばざるべく旁運搬設備に多大の資本を要し、更新計畫上安全且つ便利なりとす

る箇所に於ては官行に依りて斫伐をなし之を一定の箇所に搬出して社會の需要に應ずることあり

右の趣旨に依りて當署に於ても明治四十一年度より伊尾木岸の東岸に於て一箇所官行斫伐事業を開始したり

大正三年度に至り更に其西岸に於て一箇所斫伐事業を開始し、現今にては左右兩岸に於て二箇所經營し居れり、每年面積約八十町歩造材五萬石乃至七萬石を伐採して之を伊尾木工場に搬出し同所にて官廳及民間の需要に應じ居れり

官行斫伐の末木は從來空しく林地に遺棄せられ、却つて更新上の防害なりしも兩岸事業所中西岸の事業所は昨年度より、東岸の事業所は本年度より、此末木を原料として製鐵用の木炭製造事業を開始したり

產額豫定一萬四千俵從來に比して一層更新上の利益利用上進を見る事となれり

之等のため使用する經費一箇年約六萬圓本年度の如きは約八萬圓に上れり、而して之が爲要する勞働者の延人員約五萬、力めて地方住民を使用の方針なるを以て此の十中八九は、郡內住民にして多くは伊尾木安田及奈半利川流域地方の者なり

東川村大井小字杉瀨に明治四十一年末より製材所を設け、前記造材の中約六割の粗惡材を以て、經費每年約壹萬圓を使用し主として製函用の六分板を每年七萬坪製造し居たるも、杉瀨以下伊尾木林道開通し且つ市場に於て丸太儘の需要增加したる等、製材所設置當時と其狀態一變したるを以て昨年度限り之を廢止したり

（未完）

隨筆

如是我聞錄

竹川生

○チツト舊聞だが、十月の初めに北海道から來た人の話に、北海道は內地と大分樣子が違つて居て、勞働者の內で最低賃銀を取るものでも一日壹圓七拾錢を下らず、上の方では貳圓五拾錢も參圓もの收入がある、農地には馬鈴薯が非常に澤山作つてある、其收穫期になると薯掘りで多大な收入があるといふ、ソコで役所や會社の小使を務むる者は中々無いさうだマダマダ其れ所でない、役人は誠に氣の毒な者だとお百姓から同情やら冷笑やら其れは其れはミジメなものだと云ふ話である、無論小使も役人も、臨時手當を頂戴して居るが、そんな事では問題にならぬ、床屋がバリカンで參拾錢、鬚剃りが廿錢、草鞋一足が拾錢乃至拾貳錢、米は北海道米なら四拾五錢、內地米なら五拾錢を越すだらうと、何が安いかと聞いたら、先づ安いものは無いと謂つた

　世の中は買はぬか安し秋の暮

○何で左樣に高いかと問うたら、畢竟戰爭の爲めに百姓の景氣が良いからだといふ、馬鈴薯から澱粉を製造する、其れが戰爭前に比して、ザツト四倍高にも賣れる、靑豌豆などは巴里の食卓に上れば一粒何程といふ途方もない値になるさうだ島渡した百姓は一年の收入が數千圓或は萬を越すと稱する、時局以來北海道材が來ぬために、內地の縱桝が非常に騰貴した、其れは船腹不足の爲だと多くは稱して居るが、景氣の良いお百姓が住宅、納屋、倉庫等の建築に消費する材料も、隨分莫大なもので、船腹は不足せなんでも是がために隨分高價になつたに相違あるまいとの話

　豆男芋女冬籠りけり

○昨年四月頃、滿州を旅行した人の話に雉子山鳥が澤山に居たとのことだ、長春から東方二十里許りの間を自動車で旅行したといふが、山もなく田もなく、一面の畠で壠土に右、尾長鳥の居ること、丁度內地の田舍道に家鷄が遊んでる樣だといふ、さうして中々逃げぬ、自働車が間近になつて始めて側方に避けるといふ、銃獵家は正に垂涎三尺たるべしである

○獵といへば、木曾では何といつても鶇である、鶇はツグミ、禁ミの義、夏至の後聲なければ云ふ、と言海にある、木曾の鶇は又烏居峠に止めを刺す、美濃路のものは、マヅイ、北陸も然りだ、玆に鶇

について一の悲劇がある、元來鶇は西伯利亞で繁殖するといふ、是は當てにはならぬが、日本海を渡つて北陸に來ること丈は事實であると聞いてる、沿海州から鹿島たちして、遠い海空を日本へと急ぐ其頃は曇り強ちで、中々野も山も容易に見えまいと思へる、誠に心細い旅路である、落伍者となつたら魚の餌になるばかりだ、早く著きたい著きたいが心一杯である、其處へ陸が見える、其の嬉しさ譬へ樣もない、啼く啼く、皆な歡喜の聲を揚げて啼く、併し永の飛行に勞れも多い、何が何でも手近な所で一ブクせねばと、身を投げる樣に著し、可哀哉、其處に網が張つてある、店頭本束價幾何、斯くて無慈悲な人間が舌鼓を打つ鶇、其れには右申す樣な悲劇もある

　遠征の子を思はざらめや鶇網

○鴻雁何自二北地一來、雁は和漢共に北地より來る、海を越して來る、來る時には木切れを啣へて來るといつてある、疲勞を覺ゆれば其木を浮かして之に休む、又啣へて飛ぶ、遂に北海の濱に到著する、最早木の用はないから其處らに置いて、思ひ／＼に遊び暮らすのである、春になつて北に歸るとき、復た去年の木を啣へて去る、併し其木片が何何がしか殘る、といふのは、冬の內に哀れ最後を遂げたものがある爲である、誠に悲痛な話ではないか、依て浦人が此木を集めて風呂を涌かし、不運なりし雁の冥福を祈るといふ、是が雁風呂の謂れ因緣である、風呂を涌かすなど、如何にも俳味津々だが、鶇の話を聞けば、雁の談も聯想せずには居られぬ

　年取りて淚にもろし歸る雁

秋田に活動した人々

十和田湖南JT生

僕が秋田に來た頃から、秋田大林區署に職を奉じた人々を書き列べて見よう

○加藤君　お名前は忘れて仕舞つた、君と初めて遇うたのは大正二年の暮れであつた、僕が公務出張の序に大曲小林區署に君を訪ねて快談した事があつた、ここに來る前秋田小林區署にゐて、その時分僕の方の署長をしてゐた遠藤林學士（福島町出身）と一所だつたさうで、よく君の噂を聞いた、その後職を辭して鄉里に耙臥されてゐるやうだ

○原七郞君　僕の來た頃早口小林區署に居られた、僕と前後して早々から角館に轉任した人があつて、その人から君の事を聞いて、早速手紙を差し上げたら直ぐ返事をくれた、其後年賀の交換などしてゐたが、何時とはなしに絕えてしまつて御無沙汰致してゐる、日立鑛山に入り敏腕を振つてゐる、君とは未だ面識はないが、君の弟とは小學校を共にした

○野村光智君　大正二年の春長谷部君と初めて大林區署に出頭した時、恰度君には森林主事の講習に出席中で、大林區署の玄關でお目にかかつた、其後大舘小林區署にしばらくおられたやうでしたが、僕が入隊中辭せられたらう今頃は職員錄にも見えないやうだ

○高野金作君　原君と共に僕のゐる七日市小林區署に居られた事があるさうだ、下宿屋のものからたま／＼噂を聞く、八月上小阿仁小林區署から、技手に昇進して楯岡小林區署に轉じた

○島田勘四郞君　能代小林區署にしばらく敏腕を振はれた、扇田小林區署に轉じ更に松本に轉じ、四月屬に進み浪江に轉任せられたやうだ

○小林哲三君　君と僕とは前後して秋田にパンを求めた、其後お互ひに轉々として會ふ機會もなかつたが、五月扇田から此の七日市に轉じて來て二人は机を列べて仕事をする事になつた、四月技手に昇進して今ここで斫伐主任をやつてをられる、もう近い中にお父さんになる筈、結構々々

○山村克人君　盛岡の高農を出て本年大林區署の施業案に入つた、休暇歸省の折秋田市に行つて面會しようと思つたら、丁度新庄へ出張中で會ふ事が出來なかつた

○長谷部眞一君　電報で打合せたりして共に秋田に赴任した、大正二年四月十日

秋田驛から君は北へ、僕は南へ、相別れてから、もう六年になる、僕が入隊中秋田から郷里の方へ轉じて、慥か飯山にゐる筈だ互ひに音信を絶つてゐるが、何時も元氣の事でせう

○千村吉雄君　一年ばかり早口にゐた、そこを去つて盛岡の高農に入りもう來年は卒業の筈だ、昨年の夏郷里で會うた

○原潔君　本年の一月森林主事の講習に來てゐて大林區署の應接室で會うた、學校時代に比して身丈けも延びて、うすいながらも鼻下には髯を有してゐた、近頃技手に昇進するといふ評判が高い

○松澤敏雄君　今は古川家の阿仁鑛山にゐるが、初め能代に來て講習が終ると扇田小林區署に轉じ、間もなく辭して古川に入つた、昨年の七月僕が米内澤町に通ずる縣道をテクツてゐると、馬車の中から呼びかけるものがある、誰だと思つたら同君だつた、小林區署へも二三回寄られたさうだが生憎何時も留守で會ふ事が出來なかつた

○古川眞夫君　大曲小林區署にしばらくゐた、御大典のあつた歲の秋、會ふて快談した、夜の十二時僕の歸郷を停車場に見送つてくれた、闇の中に突立つた君の小さな姿が目の前にちらつく、明治神宮御造營局に勤めて傍ら某校に通ふて勉學してゐる、昨年の夏郷里で會うて千村君と三人盆踊りを見に行つた

○東原智君　講習が終つてから大舘小林區署にゐたやうでしたが知らぬ間に辭して仕舞うた

○中村五郎君　小林君と荷上場小林區署にゐた事がある筈、林區署を辭し今年縣の林業技手になつたやうだ

昨年と本年赴任した人々も二三人あるやうたが今回は略して何かの序に書き加へる事にして筆をおく

（七、一〇、五稿）

後の一年有半（續）

於白頭山麓　坂本光太郎

○病院は理想的の避暑場

近頃は餘程傷口も治癒して來歩き振りも大變見よくなり一見病人の樣にもなくなつたので知らぬ人はよくあなたは何處がわるいですかなど〻尋ねるのであつた、「否や僕は病人ではありません」と答へると「病氣のない人がなぜ入院なされて居られるです」かと問ひ返されるから「私は此處へ避暑に來て居るのです」とやると「戲談ぢやありませんよ誰が好んでこんな處へ避暑に來る人がありますか此附近にも五龍閣温泉或は龍岩浦があるぢやありませんか」

「然しそれらはありふれた避暑法であつて殊にあの邊は寂しく無味乾燥な且平凡なる單調生活を送るのが常であるが私が此の病院を選んだのは設備が充分であり構造が完全してゐるから非常に涼しく蠅とか蚊とかいふ厄介物は一羽も居ないから氣樂に晝寢は出來それに他の避暑地には傳染病多く又は不規律な非衞生的生活に陷り易く爲に流行病等に犯される虞れがあるが此處には風の涼しい美しい看護婦が澤山居て毎朝夕手を握つて呉れ名醫名藥の中に衞生的生活をするので決して羅病の恐れは御無用であるから少し病的の人は宜しく此處へ避暑に來るべしで其の方が最も安全であり且又理想的の避暑法であると思うたからです」「成る程それも氣拔な一案ですなハア、、、、、」

坂本さんはそして毎日何を書かれるのですか」（渡鮮一年有半の起稿中）「僕は今それを書いてゐるのです避暑には宜しく病院を選ぶべしといふ論文を書いて天下に公表するのです」この時分こんな談話がよく交換された、とかくして初の中は看護婦の言付けを守り可愛がられもしたが傷口は或る程度迄は目に見へて癒つたがそれ以上は少しも効果が現はれず自暴自棄を起しだん〳〵横着になつて藥を服む事を忘れてゐたり或は二三回分を一回に義務的に服み又は檢温器を腋に挾んだ儘椅子に腰かけて手紙を書いてゐる中に忘れて落し破損料として九拾錢の辨償をなし又は仰向になつて書物などを見てゐる中には何時の間にか檢温器が袖の中に晝寢をしてゐて檢温の際に用をなさず再

び看護婦の御足勞を煩はす樣な事がよくあり厄介視される樣になつた

然し病人も苦しい中は熱心に藥も服むのであるがこんな風に服藥を忘れて居り檢温に氣が着かぬ位になれば結構であると自分は喜んで居た

野次馬が二人揃つて居るので色々と綽名を研究して入り來る看護婦及附添人の動作風態に依つて一々命名した今其の一例を擧げて見れば次の樣な次第である

先づ第一に大きな尻を振り歩くHを「グース」大きな鼻が顏の眞中に蟠つて居て顏中鼻だらけのIを「ブルドック」何時も忙しさうに歩くKを「急行列車」澄し顏のSを「スマシング」看護婦帽を何時もアミダに被つて居るMを「阿彌陀如來」金縁眼鏡のハイカラを「ゴールデンハイカラ」白粉をコテ〳〵塗り付けて居るOを「粉箱」少し足の具合が惡くて右足を右方に振り上げて歩くFを「スケーテングマン」見習看護婦Iを「掃除婦」Nを「藥配達婦」等其他枚擧すれば限りがない

その中に彼等の足が遠くなつてTの酢酸銀の濕布交換に來る當番さへも來ない時が度々ある、一日三回を一二回に省略する事もありTも少々自棄になつて提議を申し込むなど不平を鳴し出した

こんな我儘をして彼等を困らしたり野次つたりしたもの〻彼等が看護婦に志した動機及び掃除婦藥配達の見習より叩き上げて患者取扱法を會得し修養と經驗を重ねた後試驗の結果に依り帽子に青筋を一本頂戴して一人前の看護婦となり進んで藥學病理の大要を心得て三十五六歲に至りて看護婦長となり末は產婆位になつて餘生を送る彼等社會の內幕を探つて見ると此間相當に辛酸を嘗めていやな思ひを淩がなければならぬものだと聞いてはこれまた同情に値するものあり又、しなければならない

迷信と舊思想

同室の支那人は四十歲以上の樣に見受けられるが彼は珍らしく散髮をしてゐた或る日のこと彼が外出して歸つて來たのを見ると頭の中腹より上には短い毛を殘して下を全部剃つて恰も皿を被つた樣な格好をして來た看護婦始め附添人等は一度にドット笑ひ崩れた

其の理由を糾すと斷髮以來病氣勝ちでそれに年寄つてからハイカラにして居ないで舊式になれと友人が勸めるからこれから又髮を伸す氣になつたのだと

丁度明治の維新に我國でもチョンマゲを斬る斬らんで八釜しかつた樣に迷信と舊思想に搦まれて居るのだ

其の後毎日醫師が回診に來る度彼の頭を撫で〻「ニーヤトンツンゲセウハイイ、アン」と調弄ふ中に二三日後には全部剃り落して來たのであつた

○玉の輿

Tの附添をしてゐる支那人は、何んぼ私服を着て外面は日本人化してゐても矢張り支那魂が失せぬので或る晩の如きは此の不自由なる病人を置いて外出し其晩は歸らず翌日になつて歸つて來たのでTは直ちに叱り飛ばして返し遣り代りに二十八九歲の婦人を傭つた此の綽名を玉の輿と命名した

僕は近頃よく〳〵病院生活に飽き〳〵して口癖の樣に今日は退院する明日は退院するといふて居たが醫師から命令も出ないので困つてゐると、玉の輿がいふには「坂本さんもう少し入院して居なさいあんたの樣なゆくわいな方が退院されると此室が淋しくなつてTさんも話相手がなくなつて退窟されるじあんたの樣な元氣のい〻方が退院せられてまた重病患者でも這入つて來ると私等は氣兼ねでいやですしそれにあなたはまだ全快されたのではないから今退院すると爲めが惡いから、、、」と勸めるので一時退院を見合はせてゐた

入口の處の寢臺に居たヨボが退院すると直ぐ後へ滿鐵鐵道員の脚氣患者が入院して來た彼は擔架より寢臺に移され仰向になつた儘氷嚢を吊して額と心臟を冷やして唸つて居るのである

これを見た自分は今より九年前此の病で名古屋の病院に一夏を送りし時の苦痛を追想しいたく氣の毒に想つた而して彼は

一日に三回宛脚に卷いて居るカンブルチンキの溫布を看護婦が取り替へ附添人は一二時間おきに糞便を取つてやり醫師は夜間と雖も特別に診察に來る事もあつた附添人は玉の輿が兼務といふ事になつた脚氣患者は毎晩大便を取つて貰ふ爲めにをばさん〳〵と附添人を呼び起すのであるが此の玉の輿なか〳〵の深寢入かで容易に起きない僕は退窟のあまり晝寢をすることもあり夜とて容易に眠られない彼は苦しい息の下から呼んで居るから氣の毒におもひ自分が代つて起して遣つて居たので起して貰ふに都合よく何時も自分とTの寢臺の間に寢て居たが昨夜は其の病人の枕元にうたゝねをした儘眠り込んでしまつた

夜中にをばさん〳〵と頻りに呼んで居るが容易に起きさうもないので自分が起きて行つて搖り起して遣り寢臺に歸り毛布を被らうとする其の刹那、、彼玉の輿はむつと起き上り血相變へて前につきのめらんばかりに僕の寢臺の側に走り寄り將に搖き着かんとする權幕であつたので氣でも狂うたのかと驚き遑早やて其の利腕を捕へた……する

と驚て吐息をした後「アラー、いやだわ坂本さんだのわたしやうちの患者さんが苦んで寢臺から落るところかしらんとおもつてビックリしたのよ……」と互に顔を見合はし胸を撫で下すのであつた

其の翌晩は大豆の莢豆を買ひ來り冬は勿論院内各所に蒸氣が通しあり夏とても洗面所には洗面用、飲用の炎沸せる湯が湧出し居り卵さへも充分にゆで得て火氣は不必要の設備しあるにも不拘看護婦に懇願して秘密でアルコールランプを借り來り壁腰でゆで居たが過つてアルコールランプを轉覆しアルコールは四方にひろがり青い火焔があがつた彼女は狼狽してエプロンをはづしてアルコールを拭はうとした火は其れにも燃え移り悄然自失なす所を知らざる狀態であるので早速自分は起き上り側にあつた莫蓙を投げ被せ大事に至らずして消し止め危險を免れ得たのであつた此の頃は非常に火事の多い時であつて毎晩の樣に支那街には火事があつたが或晩の如きは夜十二時頃突然急遽しき警鐘の響と共に病院の門前に當つて人の響動めく聲に和して支那街の群犬鳴り互る囂々たる物音に不圖頭をあげて見れば此は如何に

前の硝子窓より赫然たる火焔の燃え揚れるが見えたゝすは一大事病院が燒けるのかとおもつて跳ね起き見ればさばおらずして門前の遊廓の火事で電線は燃え切れて暗となり支那の二頭馬車は縱横に走り廻る支那巡査は見物人を制するに拔劍を振り廻はし危險いはん方なしであつた

或る日のこと突然「やアー」と自分の枕元に眞黑い仁王が立つたゝと頭を擧げて見たが誰とも見分けがつかなんだ其の中に仁王は笑つた「オーS君か！」と自分は起き上つた彼れと逢はざること僅かに四箇月ではあつたが眞黑くなつた顏に薄髯を生やしてゐたので一寸初めは誰ともわからなんだのだ出張中はお互に黑いのでさほどにも感じないが役所へ歸つて日蔭物と比較して見ると初めて自分の黑いのが解る

曩に自分が歸つた時に停車場へ迎へに出て呉れたO君H君等の如きも僕が聲をかける迄氣付かずに列車から吐き出される群衆の中を探してゐた位であつた

○浮世の地獄を後に！

ます〳〵病院生活も飽き〳〵して一日も居留る事が出來なくなつた指折り數べれば丁度今日で入院してより七週間になるもう今日こそは退院すべしであるとおもひ朝醫長に退院の良否を糺したるに「さうですねもうこれだけになつたから入院して居ることがあいたら通院してもよろしいが若し通院する事が苦痛である樣なら新義州で宇佐へ通ひなさい」といはれたので早速室へ歸りいよ〳〵今日こそはお暇致しますと退院の準備に取りかゝると玉の輿がもう少しだから辛抱してゐなさいと止めるのでそれもさうかとおもひ止つて寢てゐたが何んとなく自分の心が退院せよ〳〵今日が退院の好期であると命令する樣な氣がしてならぬので、また

おもひ直して斷然退院することに決心し色々厄介になつた人心易くして呉れた人々の所へ暇乞ひに行つたが何時も冗談を言つて居たのでまた今度も戲談とおもつてもかこちらは眞面目に禮をしてゐるのに「何ですよ坂本さん冗談ばかりおつしやつて其處へ腰をかけて御覽……」などゝ肩を叩く人さへあり誰も初めは信じなかつたが其の中に眞意が解つたか元の室へ來て荷物を取り片附けて呉れる人さへもあり T氏や脚氣患者は羨ましさうに後を見送つて居るのであつた玄關迄見送られてニーやの人力車に乘り籠の鳥が舞ひ出たるが如き心地して浮世の地獄を後に新義州さして車を走らしたのは九月も半ばの夕暮れであつた。安東縣の市街には早や寒い秋風に砂塵が吹き捲いて夏の俤はなかつた……

退院後見舞に行つた時T氏は松葉杖に倚り稍歩行し得るやうになつたと喜んでゐたが坂本さんはいゝ時に退院せられたと言ふので聞けば脚氣患者は僕の退院した翌日終に彼の世の人となり不歸の旅路に立ち去つたとの事であつた

○屠所の牛

退院の翌日からは宇佐醫院へ通院した宇佐は一瞥して曰く「ア、こりや大變よく治つてゐるもう二三日で癒ります」といつて硝酸銀棒で燒いて軟膏をはつて呉れた殆んど毎日の樣に「坂本さんもう二三日で癒ります」を耳にたこの出來る程聞かされて宇佐に通ふこと一箇月餘に及ぶ「坂本さんもうよろしい」とのうれしい言葉を聞いたのは實に十月の二十二日の朝であつたと記憶してゐる

おもへば四月二十日より今日迄百八十餘日約半年間此の病のために苦しめられたのであつた

茲に病氣は全快したが熟々考へて見ると病院にある中は理想的の避暑とか何とか豪ちさうな事をいつてゐたが今になつて見れば莫迦らしくなつて來る同じ金を費すにしても眞に避暑を目的とするのであつたらば愉快に消夏した上に必ずや心身共に得る處が尠くなかつたらうが今回の如きは唯苦しめられし上に金甌無缺の體に傷跡を求めしに過ぎないのだ

退院の翌朝業務課長の下に挨拶に行つたとき細かく病狀を尋ねられた其の時は別して何んともおもはなかつたが其後再三尋ねられた或は電話にて宇佐に問合はしたなど言はれるので此頃は上海の支廠出張所へ數人轉勤の低氣壓が調査係の方へ向つて居る頃のことゝて人心恟々の折柄これは僕も轉勤の候補者で病氣全快を待つて轉勤命令を下げるに相違ないのだ退院して嬉しとおもへばまた轉勤かとおもつてゐると十二日の午後退廳の際業務課長の前に呼び出された

是は僕に白矢が立つたのかと屠所に赴く時の如き心地して閻魔の前に罷り出で宣告を待つてゐると苦い顏の課長も今日は少し笑顏となりやがて徐に口を開き

「話しといふのも外ではないが今度此處に新設されることになつた朝鮮製紙會社から注文があつたので君を適任者と認めて特に選拔した譯だが如何かね、若し君が會社より役所の方がいゝとおもふならまだ澤山希望者がある事であるから强ひて勸めないが私の考へではね其の方が君の將來に有望ではあるまいかと思ふそして向ふでも急いでゐるやうだから二三日の中に決定して回答して呉れたまへ：」

との有難きお言葉であつた

製紙會社へ入社したいと言ふ望もあつた矢先それに課長が折角心配して呉れるので「先則制人後則爲人所制」の格言を思出し何れにしても山行きは免れない運命にあるので營林廠に在つて轉勤するより入社して上海へ行つた方が課長も言はれだる通り前途有望と考へ熟慮の上いよいよ官吏の足を洗ふべく決心し十月十六日醫師の診斷書を添附した辭表を懷に登廳して返答に及ぶと「明日は神嘗祭にもあり又自修舍の新築一周年であつて何か催しがあるさうで聞けば君も其の重役の一人だといふからそれでも濟ましてからのことにしたらよからう」とのことで僕も永らく自修舍にゐたことでもあり幸ひあすが其の記念日の祝賀會もあることであ

るから其れを濟まして後辭職すること、なり辭職願書は課長の手許に留め置く事になつた、然し今日のところでは「先則爲人所制後則制人」のやうな感はあるが將來は會社の方が有望であると信じ將來を樂みに未來に生きてゐる……明くれば十七日自修舍玄關前にはアーチに交叉した國旗は飜翻として旭に輝き廊下は萬國旗を以て飾ざられ各室内は各自思考を凝せる裝飾をなして來會者の隨意觀覽を許した

自分は室内の裝飾には神嘗祭に因み伊勢神宮の型を作りしに觀覽人一度此の前に至るや自ら壯嚴の氣起り拱手して禮拜する人さへ見受けられた室内裝飾の投票の結果は最高點を占めた

午前九時より會場（食道）に於て祝賀會が開催された、當日のプログラムの一端を紹介すれば次の如くである

第一部は型の如く開會の辭に始まり寮歌合唱、祝詞及來賓有志演說、祝歌合唱、閉會の辭、萬歲三唱に終つてゐる

自修寮歌

一、見よ鷄林の北の空、綠煙れる鴨綠の岸に久遠の塵を占ふて、誓ひ固ゝ共同の建つや雄々しき自修寮。

二、我は日東覇稱の士、尙武の花の永久に結ぶ理想の實も堅く、進む力の磐はしき力ある哉自修寮。

三、あゝ白揚に風薰る、使命は重し森のうち自治の根ざしに友垣は、結ぶ團欒は愛の園仰ぐもゆかし自修寮。

第二部は福引より始まり中庭に於て什粉店其他模擬店が開始され、次ぎには會場に於て餘興が催された

○（一）尺八とヴァイオリンの合奏（池野木下）（二）今樣古海平位（三）歌後藤（四）尺八、巖上松（二部合奏）國方井上（五）大奇術、佐藤、（六）不思議な蓄音機岡田、坂本（七）詩吟、謠曲「琵琶、踊、琴、落語、有志續いて、次は新派劇「スキートホーム」の演劇に移り和氣靄々の裡に幕となる

時は正に午後八時半大喝采を博して終りを告げ後は夜會に夜の更けるのも知らなかつたのである

次號に此の「スキートホーム」劇の脚本の一部を御慰め迄に御披露しよう

雜報

學校便り

○發火演習、朔風凜烈の十二月三日宮ノ越に於て擧行

○辯論會　同十六日例に依り忘年會を兼ねて午年掉尾の大雄辯を揮ふ

○終業式　同廿一日校内大掃除後擧行校長より訓辭あり十一時終了

○新年拜賀式　一日午前十時より擧式

會員消息

○加藤源一郎君　出征歩兵第六十八聯隊第二中隊に從屬して目下西比利亞にスチチヤンカ兵營に在り

○杉山義次君　東京農科大學森林化學教室屬に轉じ同校に勤務せらる、現住地麻布區霞町一番地丸山方

謝恩金領收報告

内藤先生の分

金壹圓　岡西謙三君
金壹圓　倉澤建雄君
金壹圓　長谷川毅君

北村先生の分

金壹圓　長谷川毅君

新家先生の分

金壹圓　池田仲治君
金七圓　柘植五郎君　今井安男君　各務信六君
高峯傳治君　唐澤繁夫君　高市茂君　岡正君
金壹圓　加藤源一郎君
金壹圓　都竹武次郎君
金壹圓　石坂季治君
金壹圓　鹽川金次君
金壹圓　長谷川毅君
金壹圓五拾錢　岡西猛君
金武圓　宮島岩見君

會員諸君に謹告

豫て募集中の内藤、北村兩先生謝恩金は十二月二十日限り締切り寄贈者の芳名及金額を記せる冊子を金額に添へて贈呈致候間左樣御諒知被下度候

大正七年十二月廿三日　校友會

謹賀新年

併而新年匆々賀狀を賜はりたる諸兄に對し茲に厚く御禮申上候

大正八年一月

長野縣立木曾山林學校
同　校友會

學校又は校友會宛年賀狀を辱うしたる各位の芳名を左に列記し茲に謝意を表す

東京農業大學職員御一同
野澤中學校職員御一同
飯山中學校職員御一同
愛知縣立農林學校職員御一同
松本高等女學校職員御一同
上田高等女學校職員御一同
埴科農蠶學校職員御一同
上高井郡立農林學校職員御一同
更級郡立農學校職員御一同
南安南部農蠶學校職員御一同
丸子農商學校職員御一同
帝室林野管理局札幌區吏員御一同
帝室林野管理局上松出張所々員御一同
帝室林野管理局王瀧出張所々員御一同
長野縣農商課耕地整理係
長野縣農會御一同
西筑摩郡役所々員御一同
北佐久郡役所員御一同
西筑摩郡稅務署々員御一同
西筑摩郡蠶業取締支所々員御一同
西筑摩郡田立村役場御中
楢川村役場御中
長野高等女學校職員御一同
大場愼六殿　遠藤宗作殿　新井多喜雄殿
羽田龍尾殿　藤卷壽一殿　石曾根四郎殿
紺田孝三殿　矢島駒二殿　安江銳太郎殿
山崎高男殿　村松三藏殿　遠藤彌一郎殿
村松一郎殿　曾根義郎殿　加藤朝太郎殿
仲俣悟市殿　伊藤喜代殿　宮森太一郎殿
安江眞夫殿　小池清彥殿　千村彌之助殿
小林鹿太殿　石坂季治殿　內山伊那登殿
金田才平殿　木村康明殿　代田文之助殿
鹽川金治殿　宮入汎省林　福田友次郎殿
小林政基殿　千村万三殿　久保田吾良殿
宮澤末雄殿　嘉村要式殿　野知里慶助殿
平田福雄殿　小島政吉殿　竹內房太郎殿
藤原幾喜殿　小林哲三殿　坂本利一殿
山崎茂作殿　伊藤榮吉殿　上條完夫殿
吉澤英雄殿　前田悅作殿　永井順殿
箕部覺明殿　岩井洋治殿　原潔殿
西尾彰殿　中澤拘殿　大久保藤太郎殿　長谷川藤太郎殿
小田寶殿　森巖殿
河島憲一殿　小林秀一殿　多田慶次郎殿
小野球次殿　奥村和吉殿　宮森太一郎殿
松上三郎殿　岩井洋治殿　月田喜代三殿
近森良材殿　横山治人殿　太田喜代治殿
伊東兵太殿　平田美則殿　上田彌太郎殿
温井誠一殿　榊原武重殿　竹內房太郎殿
福澤桃十殿　中村五郎殿　伊藤正之助殿
百瀨三十殿　志津篤助殿　長崎千万一殿
中田辰雄殿　新家園面殿　木村鐵次郎殿
渡邊隆知殿　丸山久雄殿　內田新之助殿
松島九平殿　小林政基殿　吉村金次郎殿
木下稗藏殿　稻葉增吉殿　廣瀨靜之進殿
大森久治殿　大島角藏殿　小岩井茂樹氏
矢島駒二殿　小谷益實殿　米山太郎吉殿
木村庸明殿　中島省三殿　長谷川義雄殿
鳴澤義男殿　安井嘉一殿　安江銳太郎殿
千村善三殿　松尾廣次殿　塚田繁次郎殿
白木老雄殿　佐竹兵治殿　石曾根四郎殿
松島周一殿　木下武夫殿　遠藤治一郎殿
前田早苗殿　福井利吉殿　小松六三郎殿
前田正義殿　千村万三殿　岡田彌兵衛殿
伊藤喜代殿　篠原忠江殿　平田久良治殿
但馬廣造殿　和田宗吉殿　山下不二三殿
小林哲三殿　市岡新八殿　上條嘉一郎殿
小松精內殿　皆川秀雄殿　池野萬治郎殿
長田克己殿　遠藤宗作殿　坂田勘太郎殿
岡戶廣治殿　田中泰吉殿　坂本光太郎殿
日野櫻亮殿　大脇又衛氏　松館藤五郎殿
中垣英一殿　大澤國雄殿　原田久保作殿
高橋作次殿　丸山久雄殿　島田勘四郎殿
早川一雄殿　上田鉐二殿　長崎千万一殿
德武國久殿　竹村節三殿　松澤莊太郎殿
小崎次郎殿　橫井正守殿　征矢野茂樹殿
井口利雄殿　今井武雄殿　服部啓次郎殿
岩田岩吉殿　大高政一殿　池田幸一郎殿
和田守衛殿　今野啓藏殿　伊深幾太郎殿
三尾貞三殿　野村光智殿　小林英一郎殿

水橋要作殿　長谷川毅殿　加藤源一郎殿
鹽川金治殿　中村豐治殿　久保田吾良殿
矢島武六殿　由尾忠助殿　久保田傳一殿
鷲津忠治殿　梶田實治殿　村上安太郎殿
小澤安視殿　松澤敏男殿　內山伊那登殿
田中吟重殿　澤柳壽夫殿　柳澤正之助殿
柳澤得衛殿　中島要人殿　加藤朝太郎殿
熊谷清逸殿　高木本枝殿　代田文之助殿
今井眞二殿　松原大藏殿　福田友次郎殿
中島信敏殿　喜多村弘殿　佐々木久一殿
宮城忠造殿　樋口德一殿　野知里慶助殿
小池茂樹殿　篠原爲一殿　月田喜代三殿
川合清行殿　佐藤光造殿　富士川鏡一殿
富藤正雄殿　星加正雄殿　加茂憲太郎殿
喜多村明殿　中島昌利殿　高紫眞次郎殿
篠原將英殿　松川久吉殿　木村音次郎殿
大坪時治殿　喜多村勇殿　米久保眞雄殿
佐藤誠一殿　飯沼要人殿　丸山嘉一郎殿
中岡朝弍殿　家高碩二殿　宇佐美周紫殿
今井保男殿　北川信美殿　廣瀨靜之進殿
山村克人殿　宮澤喜一殿　長谷部久雄殿
荻原惠治殿　藤枝茂林殿　等々力與八殿
飯島一郎殿　安藤清吉殿　小林桂一郎殿
奥村利一殿　和田實也殿　倉科浦一郎殿
松島周一殿　小原靜雄殿　大久保國成殿
宮川永三殿　篠原昇士殿　長谷部眞一殿
吉澤英雄殿　唐澤俊文殿　宮崎惠喜太殿
林與五郎殿　南村末吉殿　市岡源一郎殿
倉澤建雄殿　渡邊知則殿　山浦藤三郎殿
伊藤昇次殿　河野長六殿　小池金三郎殿

月野雅亮殿　澤田富可殿　北村竹次郎殿
小林秀一殿　古畑七三殿　古畑今朝茂殿
柘植五郎殿　各務傳六殿　都竹武次郎殿
樋口智久殿　市岡正茂殿　原　喜四三殿
小松良輔殿　水上壯三殿　松島長二殿
中越三郎殿　松本清太殿　柳澤憲三殿
中村五郎殿　關谷靜夫殿　岡西謙三殿
椽木三樹殿　赤羽三郎殿　池口福雄殿
小崎次郎殿　原川只一殿　宮島岩見殿
廣瀨運平殿　田中榮一殿　今井徹郎殿
高野薫見殿　加藤清一殿　石坂季治殿
村松一清殿　種倉隨藏殿　唐澤繁夫殿
田中泰吉殿　山崎高男殿　宮川昌平殿
池田仲治殿　千村善三殿　山崎兵平殿
伊藤芳郎殿　丸山岩吉殿　加藤正次殿
古澤大治殿　吉村幸助殿　下平三雄殿
佐藤一郎殿　宮入汎省殿　伊藤善藏殿
原正次殿　樋口勵殿　小林右內殿
甲田林殿　中田穰殿　北川春殿
尾重清殿　林重郎殿　矢島穰殿
原正次殿　米山條殿　原正造殿
倉津眞殿　丹澤潔殿　東原智殿
宮津巧殿　原彌藏殿　宮田實殿
小林元殿　山本茂殿　瀨在實殿
藏尾眞殿　市川潔殿　永井順殿
辻敬二殿　瀧美雄殿　古根是殿
新田穰殿　水口久殿　關琴義殿
今井欽殿　中津拗殿　原貴一殿
田中一殿　岡西猛殿　兒野榮殿
原潔殿　市川豐二殿　吉田精一郎殿

田近善右衛門殿　本多清右衛門殿
奥原吉右衛門殿　峰須賀宮次郎殿
岡戸郁二殿　中川源太殿　中畑佐耕殿
二木季人殿　加藤七藏殿　伊藤俊夫殿
高野高治殿　岡崎好殿　吉池三九郎殿
金井澄水殿　大森悅殿　伊藤昇次殿
椙山節男殿　山下常記殿　森正次殿
原田義治殿　花村隼則殿　等々力官一殿
成瀨義郎殿　福山也殿　島田雄太郎殿
園原咲也殿　下平佐門殿　志津幸祐殿
米山芳郎殿　原正造殿　岩久宗治殿
安藤次郎殿　高野金作殿　藤卷壽一殿
不免修六殿　樋口勇殿　安江悅次郎殿
伊藤厚殿　矢野佑殿　野見山定雄殿
村上道信殿　下平通雄殿　安地又四郎殿
大城朝詮殿　直井利雄殿　伊藤傳殿
山崎三男殿　井上寬一殿　出雲秀一殿
大洞盛一殿　森下義郎殿

大正八年一月廿三日印刷
大正八年一月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編輯兼發行人　安井正夫
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
印刷者　川崎本雄
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地
印刷所　川崎印刷所
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所　蘆澤書店